

永塚遺跡群と下曾我遺跡

—川辺に営まれた地域拠点—



例 言

- 1 本書は散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第4号として、小田原市永塚の台地上にひろがる遺跡とその東側低地部に位置する下曾我遺跡を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成20年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用公開事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝を申し上げます。(敬称略・順不同)
相原俊夫(玉川文化財研究所)、齋木秀雄・降矢順子・押木政巳(鎌倉遺跡調査会)、立花 実(伊勢原市教育委員会)、伊丹 徹・谷口 肇(神奈川県教育委員会)、大島慎一・岡 潔(小田原市郷土文化館)、玉川文化財研究所、鎌倉遺跡調査会、神奈川県教育委員会、小田原市郷土文化館、小田原市文化財保護委員会
- 4 本書の作成は、東海大学 田尾誠敏氏の協力を得て、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課 佐々木健策が担当者となり、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課 山口剛志・諏訪 順・小林 隆・渡邊千尋が補佐しました。

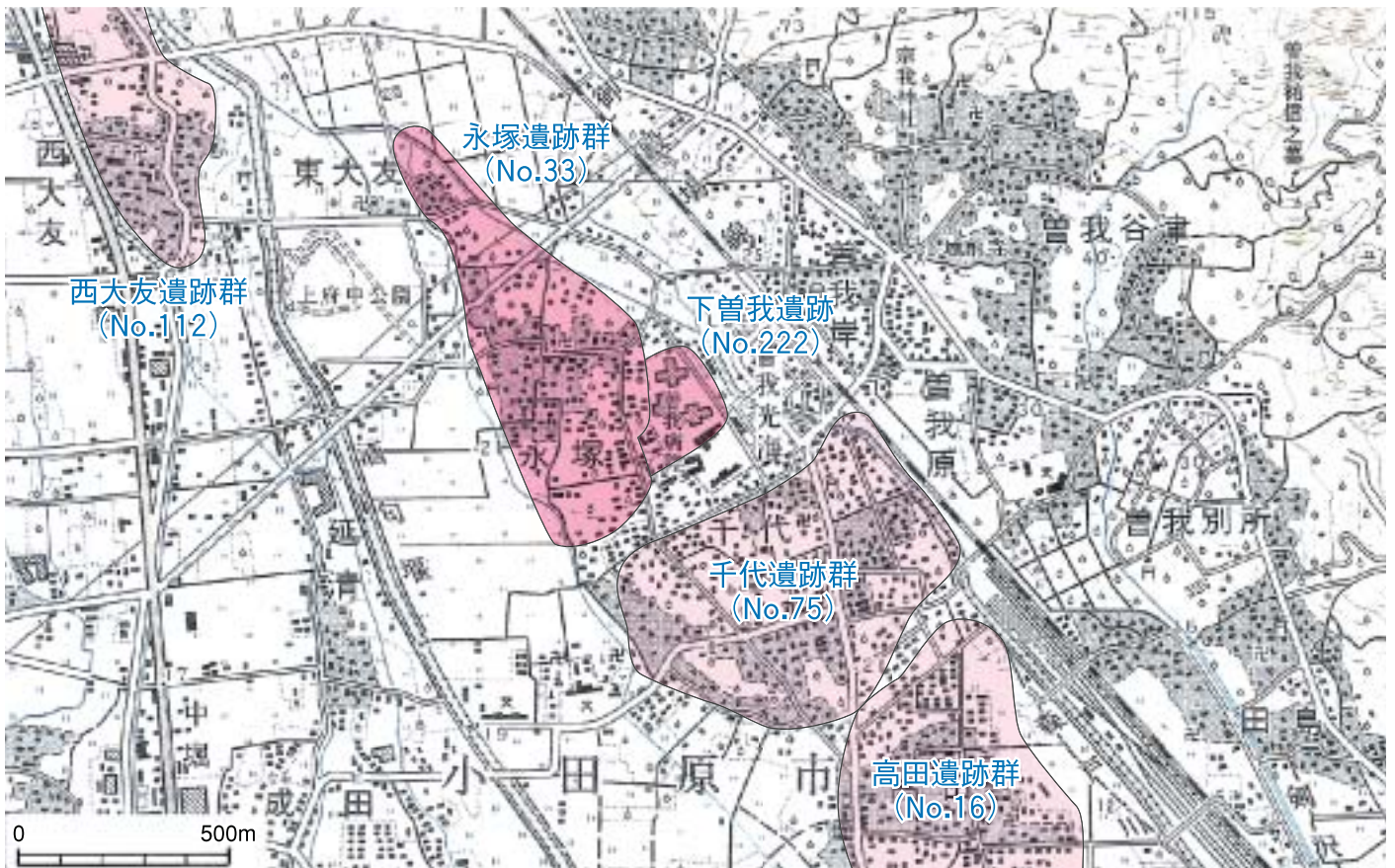


図-1 本書に登場する主な遺跡 (1/25,000)

[表紙] 下曾我遺跡検出の井戸

[裏表紙] 永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点出土重圏文鏡(原寸)

I 永塚周辺の遺跡

1 永塚の地形と遺跡

永塚^{ながつか}は、酒匂川の左岸に位置する低位台地上に位置しています。この台地は、2つの小さな谷によって永塚・千代・高田台地の3つに分かれており、標高は19mから31mを測ります。この3つの台地の中で、永塚台地は一番北側に位置し、東西が200m弱の幅であるのに対して北西から南東にかけては約1,000mもの長さがあることから、永塚(=長い塚)という地名になったということが『皇國地誌』^{こうこくちし}には記されています。

永塚の台地には、多くの遺跡が点在しており、台地上のほぼ全てが小田原市No33遺跡^{こあざ}として周知されています。そして、台地上の遺跡は、小字ごとに遺跡名を付けて呼ばれ、永塚北畑遺跡^{きたばたけいせき}・永塚長森遺跡^{ながもりいせき}・永塚一町畑遺跡^{いちちょうばたいせき}・永塚下り畑遺跡^{さがばたいせき}・永塚三竹森遺跡^{みたけもりいせき}・永塚小海端遺跡^{こうみばたいせき}というように呼称しています(図-15)。

また、永塚台地の東側に位置する永塚字小海^{こうみ}・曾我岸字尾崎^{そがぎしおざき}にも古くから遺跡があることが知られていました。ここは、小田原市No222遺跡(下曾我遺跡)として周知されています。この辺りは地下水位の高い低地部分に相当しており、台地上とは異なった性格の遺跡がひろがっています。

この冊子では、永塚の台地にひろがる遺跡群と下曾我遺跡を対象に、これらの遺跡がどのような遺跡であり、ここで私たちの先祖がどのように暮らしていたのかを見て行きたいと思います。これらの遺跡群は、小田原の遺跡探訪シリーズ3として刊行した『千代遺跡群』や高田台地上の遺跡、東側を流れる森戸川を下った位置にある国府津三ツ俣遺跡を中心とした国府津の遺跡群とともに、小田原の古代史を語る上では欠かすことのできない重要な遺跡なのです。

2 永塚の歴史

永塚は、古くは「長墓郷」と呼ばれていました。歴史上、「長墓郷」という名前がはじめてみられるのは、寿永2年(1183)7月に源頼朝が長墓郷^{ちやうぼくごう}を伊豆走湯山^{そうとうさん}(静岡県熱海市伊豆山神社)の常行堂^{じやうぎやどう}に寄進したという記述です。「長墓」という名称から、古墳の存在を指摘する意見もありますが、今のところ永塚台地上では大規模な古墳の存在は確認されていません。

	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安時代	中世（鎌倉～戦国時代）	近世（江戸時代）	近代	現代	
永塚の遺跡		永塚北畑遺跡 永塚下り畑遺跡 下曾我遺跡	永塚北畑遺跡 永塚長森遺跡 永塚小海端遺跡 永塚一町畑遺跡 永塚下り畑遺跡 下曾我遺跡	永塚北畑遺跡 永塚長森遺跡 永塚一町畑遺跡 永塚下り畑遺跡 下曾我遺跡	永塚北畑遺跡 永塚長森遺跡 永塚小海端遺跡 永塚一町畑遺跡 永塚下り畑遺跡 下曾我遺跡	永塚下り畑遺跡	永塚北畑遺跡			
市内の遺跡	八幡山古郭本曲輪	羽根尾貝塚 千代東町遺跡	前川山王前遺跡 中里遺跡 千代南原遺跡 国府津三ツ俣遺跡	田島横穴墓 羽根尾横穴墓 国府津三ツ俣遺跡 千代南原遺跡 永塚長森遺跡	千代遺跡群 高田南原遺跡 小八幡中沢遺跡	下堀宮ノ脇遺跡 酒匂北川端遺跡	小田原城開運遺跡 小田原城開運遺跡	小田原城開運遺跡	小田原城開運遺跡	
主なできごと		氷河期が終わる	三内丸山遺跡 縄文海進が最高潮になる ピラミッドが造られる	倭奴国が金印授受 吉野ヶ里遺跡 ローマで帝政が始まる 秦の始皇帝が中国統一	大化の改新 聖徳太子が摂政になる 仏教伝来 巨大な古墳が造られ始める ゲルマン民族の大移動 卑弥呼が中国に使いを送る	菅原道真が大宰府に流される カノッサの屈辱 平家が壇ノ浦で滅ぶ	足利尊氏が京都に幕府を開く チンギスハンがモンゴル統一 源頼朝が鎌倉に幕府を開く	豊臣秀吉が天下を統一 徳川家康が江戸に幕府を開く 鎖国令 アメリカが独立宣言	開国 明治維新 関東大震災	第二次世界大戦

表-1 永塚・小田原の遺跡と歴史年表

戦国時代になると、永塚は湯本早雲寺（箱根町）の領地となっています。小田原衆所領役帳にも早雲寺領として記載されており、永塚が小田原を本拠とした戦国大名小田原北条氏の菩提寺である早雲寺の領地であったことがわかります。

その後、江戸時代になると、永塚は周辺の地域と同じく小田原藩領となります。『新編相模国風土記稿』（以下『風土記稿』）には、江戸時代の終わり頃には41軒の家があり、村域は東西8町・南北6町であったことが記されています。

また、『風土記稿』には、村の西側には幅9尺（約3m）の道が酒匂・国府津へ向かう往還として通っていたとあります。おそらく、この道は関口川に沿って走る市道のことであろうと思われます。近年の宅地化や道路整備により、古くからの景観が失われつつある永塚ですが、昔の面影もそこかしこで観察することができます。

3 永塚遺跡群・下曾我遺跡の発掘調査

最初に、永塚遺跡群と下曾我遺跡における発掘調査の歴史を見てみましょう。

永塚遺跡群・下曾我遺跡で最初に発掘調査が行われたのは、昭和35～37年（1960～1962）にかけての調査でした。この時の調査成果については第IV章でも詳しく触れますが、弥生時代後期から古墳時代前期の井戸や木柵列、奈良・平安時代の井戸などが検出され、木簡や多くの墨書土器が出土したことで話題となりました。

そして、昭和44年（1969）には台地上の永塚一町畑遺跡第Ⅰ地点（旧称：永塚小海端遺跡）でも発掘調査が行われ、永塚の台地上には集落遺跡がひろがっている様子が確認されました。その後、しばらくは永塚遺跡群周辺に発掘調査のメスが入ることはありませんでしたが、昭和50年代になると永塚北畑遺跡・永塚一町畑遺跡で1箇所ずつ発掘調査が行われました。永塚北畑遺跡第Ⅰ地点では、古墳時代前期ほうけいしゅうこう ぼの方形周溝墓や奈良・平安時代の住居跡が検出され、永塚一町畑遺跡でも第Ⅱ地点で奈良・平安時代の住居跡が確認されています。そして、昭和60年代に入ると永塚下り畑遺跡でも3箇所の発掘調査が行われました。この時の調査では、古墳時代から奈良・平安時代の遺跡が濃密に分布している様子がわかり、永塚遺跡群の重要性が再認識されました。

その後も数箇所で発掘調査が行われましたが、永塚遺跡群・下曾我遺跡が脚光を浴びることとなったのは、平成13年（2001）に行われた永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点と下曾我遺跡（第6次調査）の調査成果によるものでした。この時の下曾我遺跡の調査では、昭和30年代に確認されていた井戸の再調査を行うことができたとともに、新たに井戸を1基発見しました。また、永塚下り畑遺跡の調査では古代の舗装道路を確認し、弥生時代後期の銅鏡や珍しい滑石製琴柱形垂飾品かっせきせいことじがたすいしよくひんが出土しました。そして、これらの遺跡の調査とその後の整理作業により、過去の調査成果の再検討が可能となり、下曾我遺跡を含めた永塚遺跡群周辺の状況が相対的に検討できるようになってきたのです。

その後も永塚遺跡群周辺では多くの調査が行われていますが（図-15）、最近では永塚遺跡群・下曾我遺跡とともに、千代や高田、国府津などの森戸川流域の遺跡の様相も明らかになりつつあり、小田原における先人達の営みが垣間見えてきています。



写真-1 大磯丘陵から見た足柄平野

Ⅱ 永塚に暮らす人々

1 旧石器・縄文時代の遺跡

旧石器時代とは、およそ35,000年前から15,000年前まで続いた時代です。

今のところ、永塚では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、これまでに確認されている遺跡の中で最も古い遺跡は、縄文時代早期の遺跡です。

縄文時代は、今からおよそ約15,000年前に始まったと考えられています。永塚の台地では、永塚北畑遺跡第Ⅰ地点や永塚下り畑遺跡第Ⅱ地点で縄文時代早期（約10,000年前）や縄文時代中期（約6,000年前）の土器が僅かに出土していますが、住居跡などの遺構は今のところ確認されていません。

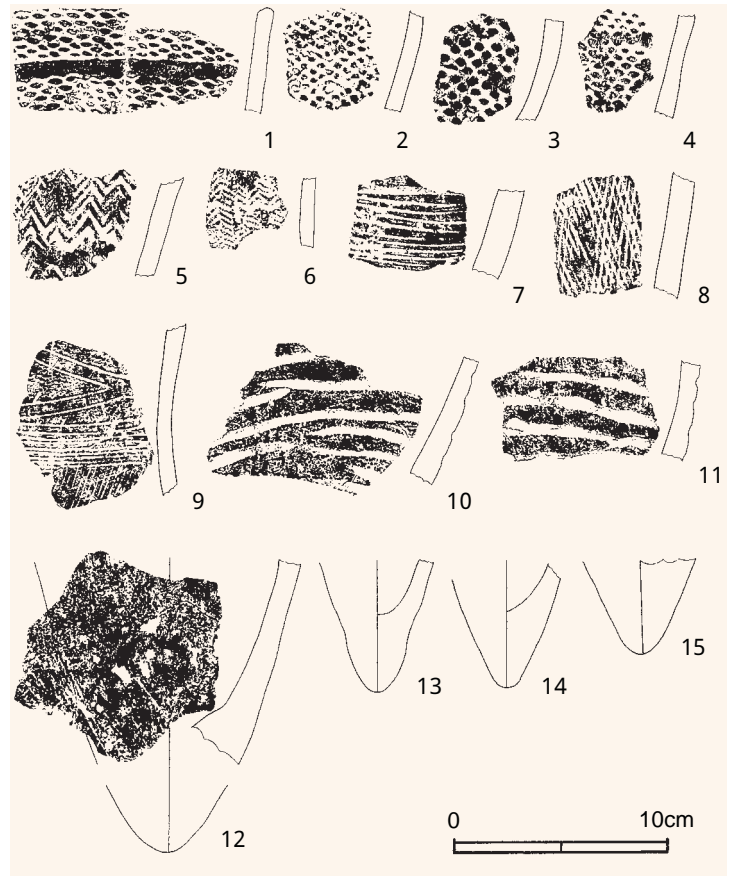


図-2 下り畑遺跡出土の縄文土器（1/5）

2 方形周溝墓の分布（弥生時代後期～古墳時代前期）

永塚が最初に栄えた時代、それは弥生時代後期から古墳時代前期（約1,700年前）と言えるでしょう。その一つの例として、永塚北畑遺跡や永塚長森遺跡・永塚下り畑遺跡で見つかった^{ほうけいしゅうこうぼ}弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓の存在があります。

方形周溝墓とは、弥生時代から古墳時代にかけて見られる墳墓です。一辺が5mから15mの方台部（墳丘）に遺体を埋葬し、周囲に溝（周溝）を掘って区画したものです。方形周溝墓の全体を調査するケースは少ないですが、永塚下り畑遺跡第Ⅵ地点のように、溝状遺構から壺の底部に^{あな}孔を空けてから焼いた同じ形の壺が、3点出土していることを根拠に方形周溝墓ではないかと考えられる遺構もあります。この土器の場合は、作る時に壺に穴を空けていることから、日常的に使うのではなく、お墓での^{さい}祭祀のために作られた特別な土器であることが想定されるのです。

このような方形周溝墓は、小田原市内では中里の川東^{せんとう}タウンセンター「マロニエ」の場所（中里遺跡第Ⅲ地点）で弥生時代中期から後期の方形周溝墓が49基確認されており、久野諏訪ノ原丘陵でも弥生時代中期後葉の方形周溝墓が多数確認されています。

また、国府津三ツ俣遺跡や千代遺跡群でも、永塚とほぼ同じ時期の方形周溝墓が確認されています（本シリーズNo.3参照）。これらの点から、弥生時代後期から古墳時代前期になると、森戸川流域を中心とする永塚・千代・高田・国府津といった辺りに人々の生活の中心があったのではないかと考えられます。

さて、方形周溝墓が見つかっている永塚北畑遺跡・永塚長森遺跡は、永塚の台地北側に位置しています。一方で、この辺りの遺跡では住居跡があまり確認されていないという特徴があります。弥生時代後期から古墳時代前期の永塚台地上での土地利用の違いを考える上でも興味深い傾向といえるでしょう。



写真-2 方形周溝墓で出土した土器
（長森遺跡第Ⅰ地点）



写真-3 長森遺跡第Ⅰ地点で出土した土器

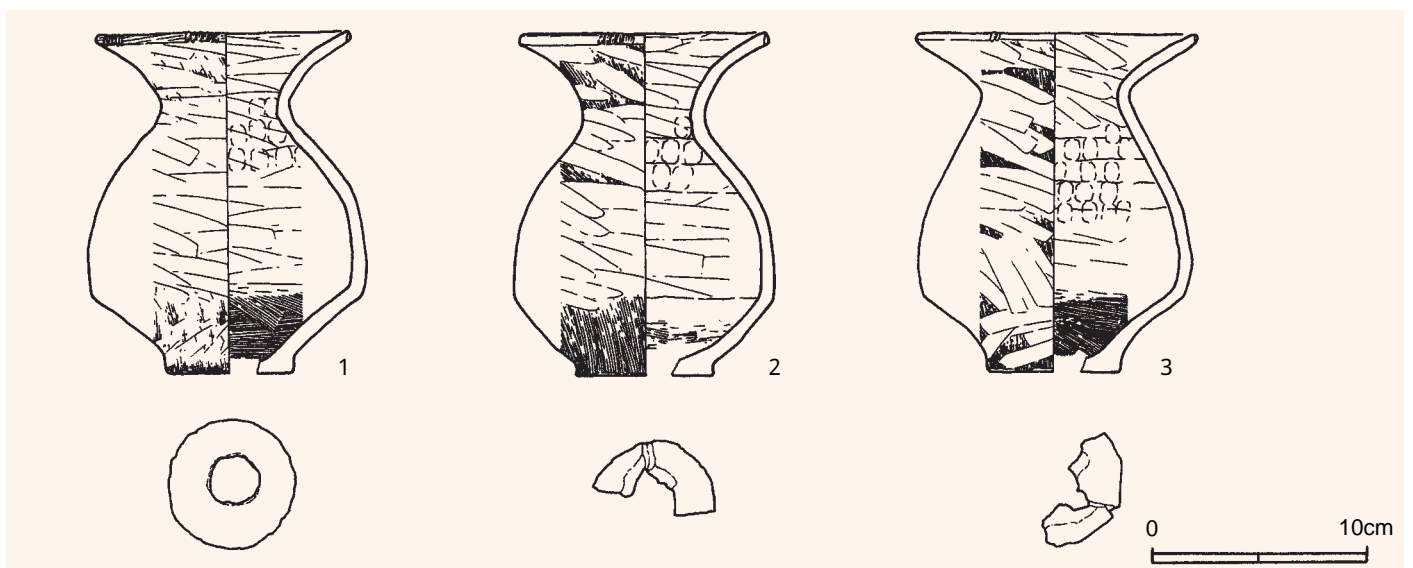


図-3 下り畑遺跡第Ⅵ地点の底に孔が開けられた壺（1/5）

3 永塚下り畑遺跡の集落（弥生時代後期～古墳時代前期）

永塚の台地では、南寄りの永塚下り畑遺跡周辺で、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が多く確認されています。前節で述べたように、台地の北側が方形周溝墓の広がる墓域であったと考えれば、台地南側は居住域と考えることもできます。

中でも永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点では、多くの住居跡が確認されています。ここでは10軒の住居跡が確認されました。

住居跡から出土した土器には、東海系（愛知県）の土器の特徴であるS字状口縁こうえんのものや櫛描波状文くしがきはじょうもんを持つ中部高地系（長野・山梨県）の土器も含まれていました。これらの土器の出土から、他地域との交流があったことをうかがい知ることができます。



写真-4 土器に入っていた球根

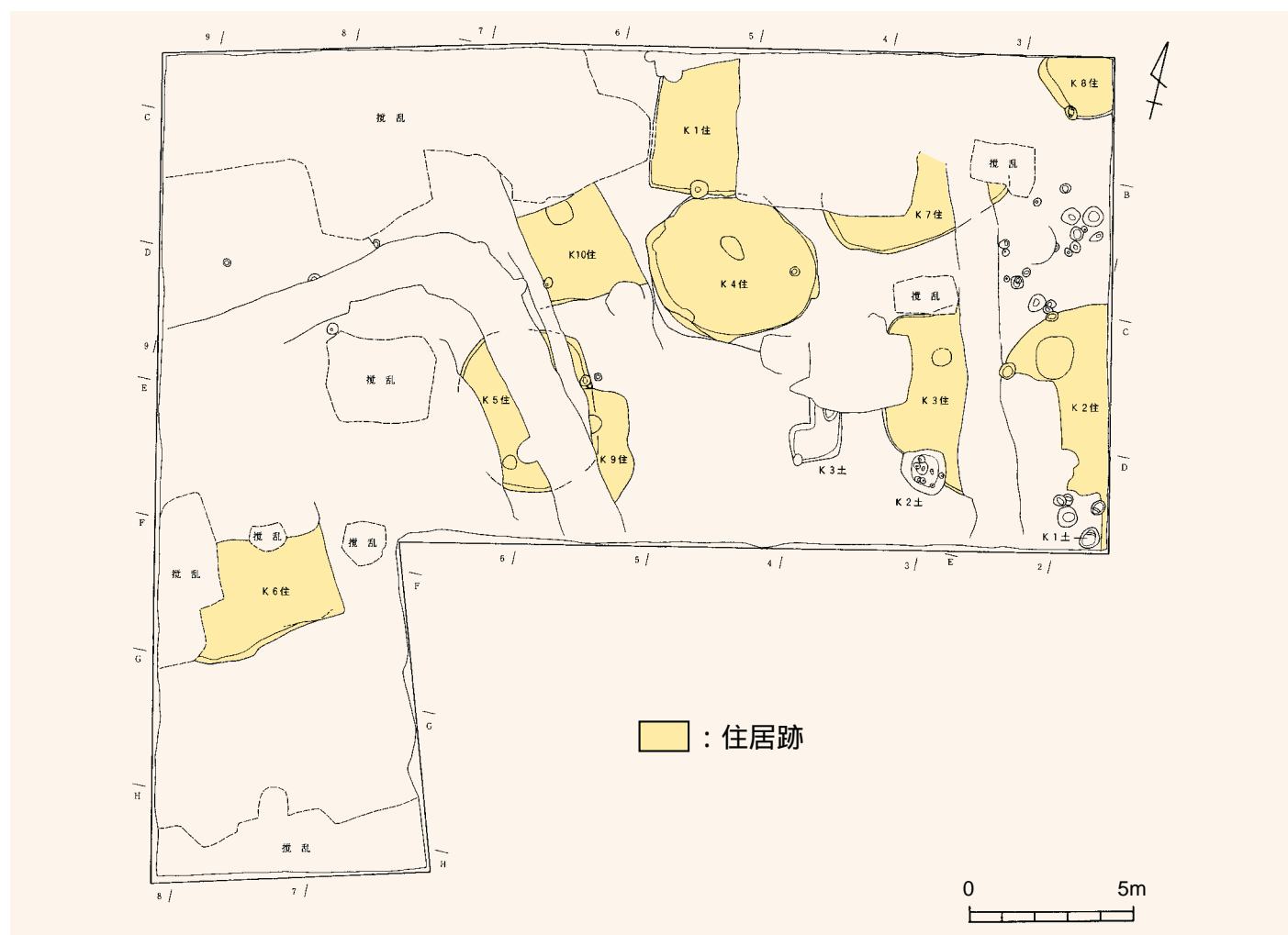


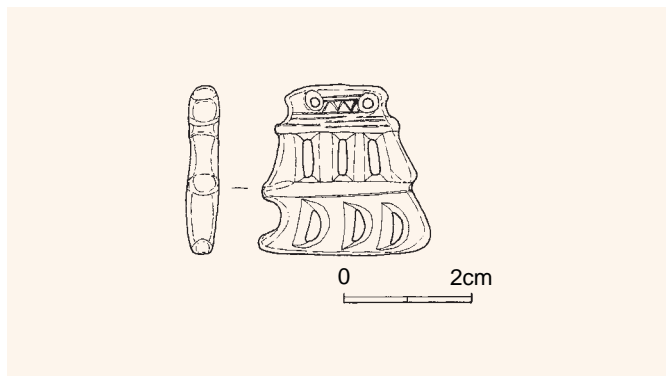
図-4 下り畑遺跡第Ⅳ地点の古墳時代前期の様子（1/300）

永塚下り畑遺跡第IV地点の住居跡からは、土器の他にも特徴的な遺物が出土しています。3号住居跡から出土した壺形土器には、炭化したユリ科ネギ属の球根（アサツキやヤマラッキョウのようなもの）が133個入れられていました。これは、薬として用いられたのではないかと考えられています。

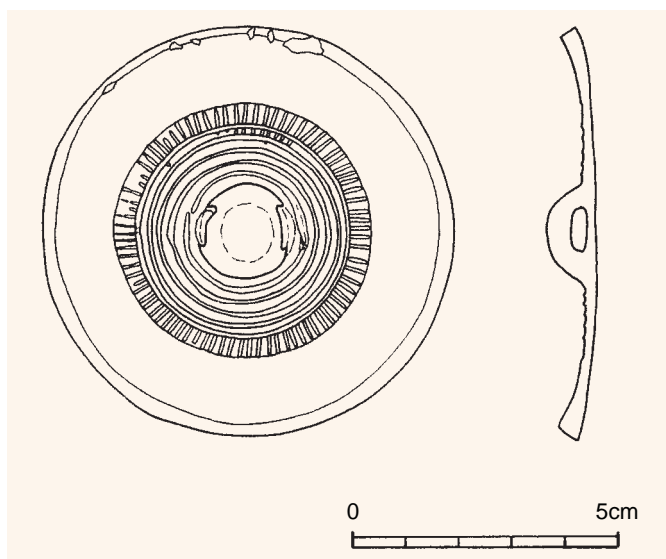
この住居跡からは、滑石製琴柱形垂飾品かっせきせいことじがたすいしよくひんも出土しています。出土した滑石製琴柱形垂飾品は、横幅26.3mm、縦幅26.6mm、厚さ5.3mmで重さは5.5gです。全国でも16例目の出土事例で、神奈川県内では2例目となります。上の方に2箇所あなの孔が開けられており、垂飾りとして、集落内祭祀などに用いられたものと考えられています。

また、6号住居跡からは、青銅製の重圏文鏡じゅうけんもんきょうが出土しています。重圏文鏡の面径は78mm、鏡面の厚さ2～3mm、外縁の厚みは最大で5mmです。中央には直径18mmの円形鈕ちゆうを持ち、重量は96.9gの完形品です。

弥生時代後期から古墳時代前期の銅鏡は、神奈川県内で40数例確認されていますが、重圏文鏡の発見は3例目です。出土した重圏文鏡は、鈕まもうこんに摩耗痕が確認できるため、紐をかけて用いられていたものと考えられます。文様は、外側に直行櫛歯文帯ちようこうしはもんたい、内側に五重円圏文が描かれ、直行櫛歯文帯には赤色顔料の付着が見られました。これらの遺物が出土した住居跡は、特別な役割を持った住居であったと思われます。



図一五 滑石製琴柱形垂飾品 (3/5)



図一六 青銅製重圏文鏡 (1/2)

Ⅲ 足下郡家想定地としての永塚

1 古代の集落分布と足下郡家

永塚下り畑遺跡や永塚一町畑遺跡の調査結果から、永塚の台地中央から南側には古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡が濃密に分布している様子がわかっています。

中でも比較的広い面積の調査が行われた永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点では、竪穴住居跡^ど24軒、道路状遺構3条、溝状遺構9条、土坑^{こう}46基、ピット106基が検出されました。

検出された住居跡は、道路状遺構に沿って並んだ状態で分布していました。集落がこの道路状遺構に沿って形成されていたことがわかります。それぞれの遺構から出土した遺物を観察したところ、この集落は7世紀末から10世紀半ばまで営まれ、最も栄えていたのは8世紀後半頃であろうということがわかりました。それは、ちょうど千代の台地上に寺院が営まれていた時期と一致しており、関連性がうかがわれます。

また、台地北側の永塚北畑遺跡でも同じ時期の住居跡が濃密に分布していることがわかっています。しかし、永塚観音堂を中心とする永塚長森遺跡一帯では、古墳時代後期までの遺構しか確認されていません。

このように遺跡に空白が生じる状況は、千代台地の寺院があったと考えられている場所の様子とよく似ています。千代の場合は、寺院があったために一般の集落は営まれなかったと考えられていますが、永塚には^{あしもぐん}足下郡^{ぐうけ}の郡家（地方役所）があったとの考えがあります。今のところ、明確な郡家関係の遺構は確認されていませんが、このような遺跡の分布状況は、永塚に郡家があったことを暗示しているのかもしれませんが。



写真—5 北畑遺跡第Ⅳ地点で見つかった住居跡



写真—6 良雲寺境内の永塚観音堂

2 古代の舗装道路

永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点で見つかった道路状遺構は、小石や土師器、須恵器、瓦の破片などで表面を舗装した珍しい舗装道路でした。

1号道路状遺構は、およそ3つの舗装面を持ち、最も新しい第1面の舗装面は15cm、続く第2面が10～20cm、最も古い第3面は20cmの厚さがありました。軸方向は西に31°傾いています。

道路面自体も漆喰で固めたように硬化していましたが、舗装材には多い順で土師器>小石>須恵器・灰釉陶器かいゆうとうき>瓦が1～2cmの大きさに敷かれていました。また、この道路には、側溝と土坑列が伴っていました。西側の側溝は幅60～70cmで深さは約20cm、東側の側溝は幅120～180cmで深さは10～35cmです。なお、土坑列は8基の土坑で形成されており、側溝および土坑列は3面ある道路の内
のいずれかの時期で道路と併存していたものと考えられます。



写真-7 道路状遺構

2号道路状遺構は、1号道路状遺構より若干北に振れており、西に17°傾いた軸方向を示しています。調査当初は溝状の落ち込みと考えられていましたが、溝底の最下層が激しく硬化していたため、これを路面と捉えて「切り通し路」のような道路であろうと考えられているものです。3号道路状遺構は、多くの遺構と重複していたため、詳細な形態は確認することができませんでした。広い範囲に硬化面が広がるため南北方向に走る道路状遺構であったろうとされています。

なお、1号道路状遺構は、3つの面の真ん中（2面）に含まれていた土器を基準に9世紀半ばから10世紀に使われていたものと考えられていますが、残念ながら2号・3号道路状遺構の時期については出土遺物の時期幅が大きいため判然とはしていません。

この道路の続きと考えられる道路状遺構は、永塚下り畑遺跡第Ⅲ地点・第Ⅴ地点でも確認されています。このような舗装を持つ道路状遺構の検出例は珍しいため、この道路の一部を剥ぎ取り、模型を作成しました。現在、その模型は小田原市郷土文化館に展示されています。



写真-8 空から見た下り畑遺跡第Ⅳ地点

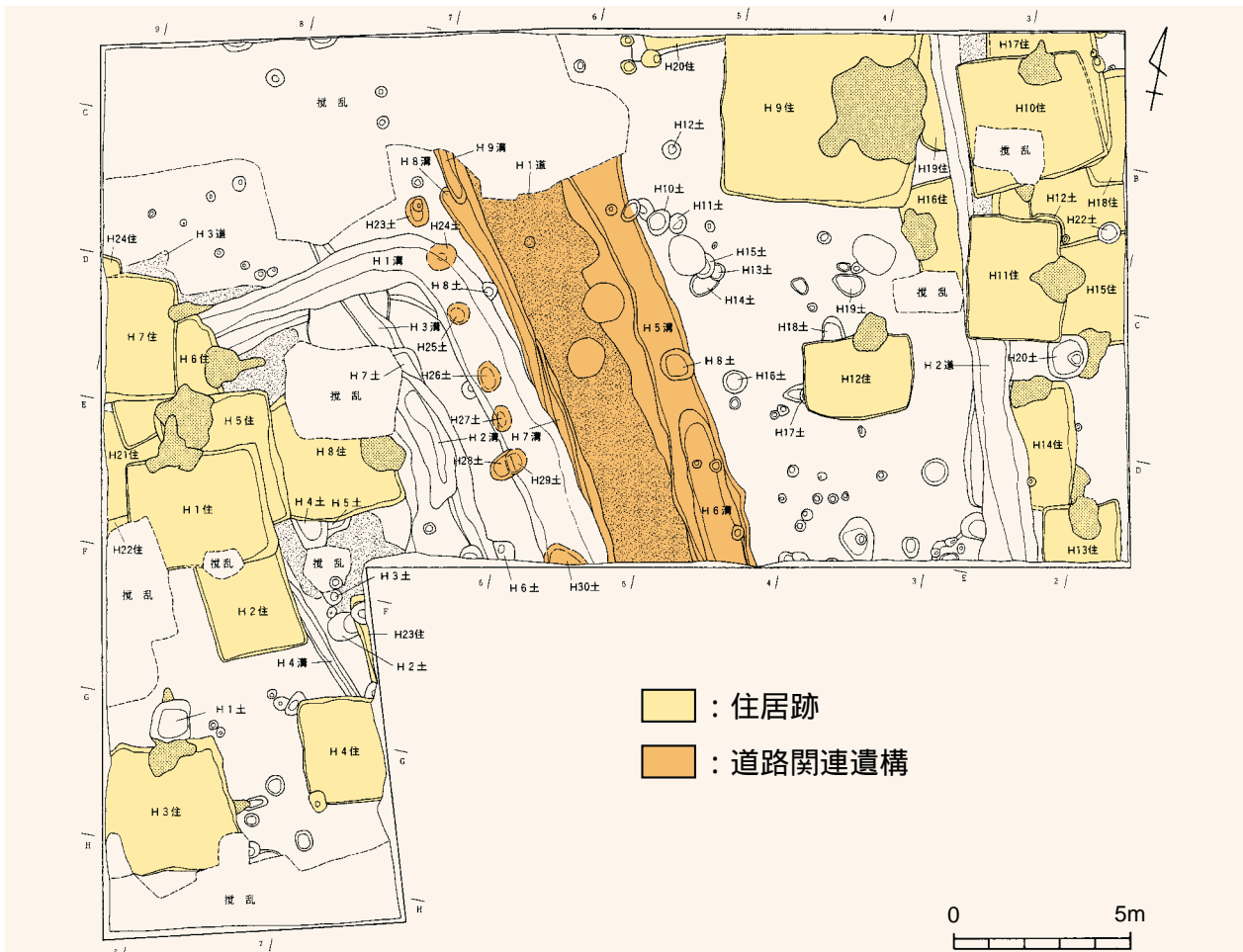


図-7 下り畑遺跡第Ⅳ地点の奈良・平安時代の様子 (1/300)

3 土器様相と緑釉陶器

永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点で出土した特徴的な土器に、小型の鉢形土器があります。

ここでは12点出土していますが、同様の鉢形土器は永塚北畑遺跡第Ⅱ地点や国府津三ツ俣遺跡でも出土しています。8世紀前半から9世紀前半を中心に、神奈川県でも金目川以西の限られた地域で流通した製品であると考えられており、地元の特徴を示す土器と言えるでしょう。

一方で、甲府盆地（山梨県）で生産された甲斐型^{かいたつき}坏、駿河国東部（静岡県）の駿東^{すんとう}型^{がたつき}坏、武蔵国南部（東京都）の盤状坏といった周辺地域から持ち込まれたものも含まれています。また、伊勢系（三重県）の甕や京の都で使われていた畿内産の坏も出土しています。永塚では地元の土器、周辺地域の土器、遠隔地の土器と、さまざまな土器が使われていたのです。

さらに、永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点では、緑釉陶器^{りよくゆうとうき}が15点出土しています。緑釉陶器は鉛を原料とする釉薬を掛けた陶器で、平安時代では大陸からの輸入品であった金属器や越州窯^{えっしゅうよう}の青磁などに次ぐ、国内産最高級の食器でした。緑釉陶器が貴重であったのは、その釉薬の材料となる鉛が長門国^{ながとのくに}（山口県）でしか産出されていなかったこととあり、長門国やその隣の周防国^{すおうのくに}（山口県）、平安京周辺、近江国^{おうみのくに}（滋賀県）、尾張国^{おわりのくに}（愛知県）、美濃国^{みののくに}（岐阜県）など、ごく限られた場所でしか生産されていませんでした。

神奈川県内で出土する緑釉陶器の多くは尾張国の猿投窯^{さなげよう}の製品と考えられていますが、このような限定生産の高級食器を一般の人々が手に入れることは難しいため、出土する場所も官衙遺跡^{かんが いせき}や寺院跡などの特殊な遺跡が中心となります。永塚下り畑遺跡で多くの緑釉陶器が出土したことの裏には、近隣に大寺院（千代廃寺）^{あししもぐう け}や足下郡家が存在し、それらに関わる人々が暮らしていた証拠と言えるかもしれません。



写真—9 鉢形土器



写真—10 緑釉陶器



西大友遺跡
出土の土器

上府中公園

北畑遺跡の住居跡

長森遺跡出土の土器

酒匂堰

関口川

第8図

永塚遺跡周辺

散策マップ

看板 は遺跡説明板設置場所

雷電神社

琴柱形
垂飾品

重圏文鏡

霜出 彩野 画



城前寺の
傘焼き祭
(5月28日)

下曾我駅

森戸川

曾我兄弟

曾我病院

JR
相模線

永塚観音堂

看板

下曾我遺跡の井戸

看板

下り畑遺跡の道路

至千代

至千代

IV 水辺に営まれた遺跡 下曾我遺跡の調査

1 1960年代の発掘調査

下曾我遺跡の存在は、1959年の曾我病院の土取工事に伴ってこくがくいんだいがく ひぐちきよき國學院大學の樋口清之氏・かねこてるひこ金子皓彦氏が遺物を採集したことから知られるようになりました。翌1960年にはあかほしなおただ樋口清之氏・赤星直忠氏が続けて発掘調査を行い、多くの成果を挙げたことで、下曾我遺跡の名前は大変有名になりました。

この時の発掘調査では、もっかん ぼくしょどき木簡や墨書土器などが出土し、木枠を伴う井戸が発見されたことで大変話題となりました。

その後、1961年にも樋口清之氏により発掘調査が行われ、井戸の北側と東側で木柵状の護岸施設（写真-12）や水路施設などが発見されました。



写真-11 発見された井戸（3号井戸）

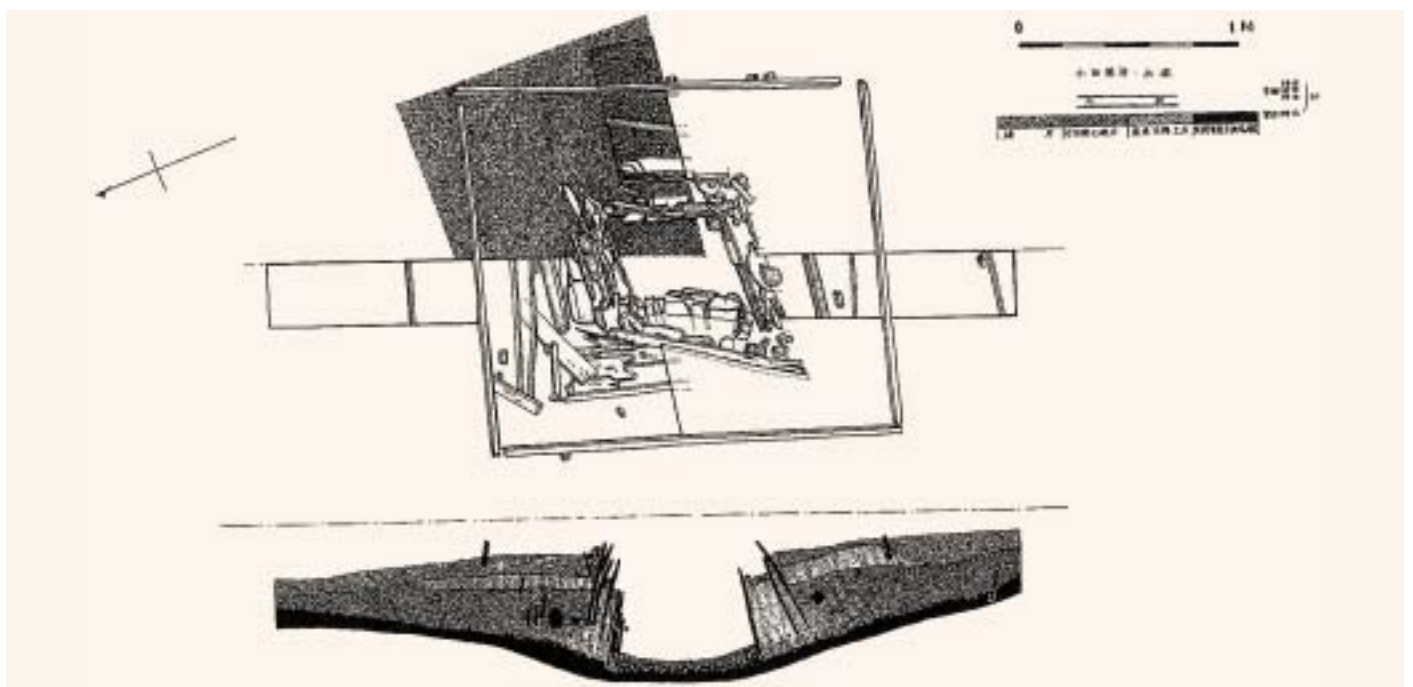


図-9 赤星直忠氏が記した井戸の図（一部改変）

1962年にも樋口清之氏により引き続き発掘調査が行われ、この発掘調査には義宮よしのみや（常陸宮正仁親王ひたちのみやまさひとしんのう）殿下も見学に訪れています。

この時の発掘調査では、新たに2基の井戸が確認されました。これらの井戸は1・2号井戸と名付けられ、1960年の調査で発見されていた井戸は3号井戸と呼ばれるようになりました（どうして最初に発見された井戸が「3号井戸」と呼ばれるようになったのかは、明らかではありません）。発見された井戸の年代については、樋口清之氏により1号井戸は弥生時代後期、2号井戸は古墳時代前期、3号井戸は奈良・平安時代の井戸であると報告されています。

この辺りに3基もの井戸が存在し、それぞれ違う時代に造られたという背景には、この辺りが生活に欠かせない湧水の豊富な場所であり、永塚周辺の人々によって大切に守られてきたためであると考えられます。

また、1960年の発掘調査で赤星直忠氏が発見した木簡は、研究史上4例目、関東では初めて発見された木簡として注目を集めました。現在、これらの出土品は國學院大學に保管されています。



写真-12 発見された木柵列



写真-13 義宮殿下(左)と樋口清之氏

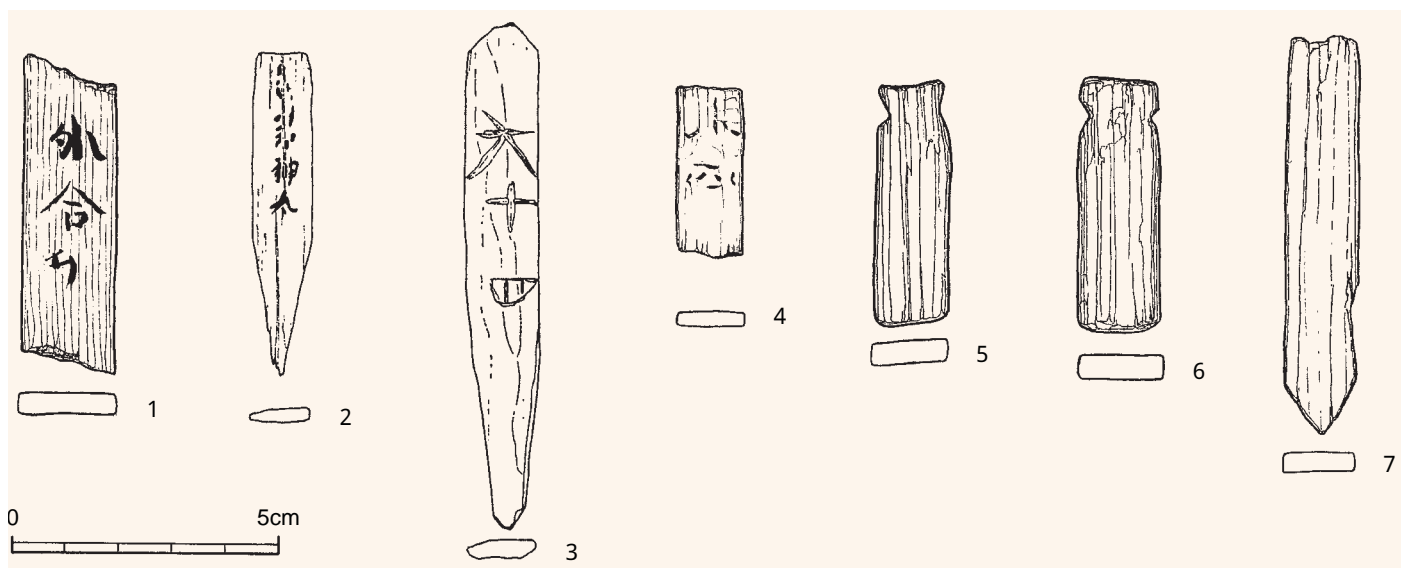


図-10 下曾我遺跡で出土した木簡 (1/2)

2 下曾我遺跡の再調査

2001年、社会福祉法人永耕園の新築工事に伴って発掘調査が行われました。調査範囲には、1960年代に樋口清之氏・赤星直忠氏が調査を行った場所も含まれていたため、実に約40年ぶりの再調査となりました。

2001年当時、樋口清之氏・赤星直忠氏はすでに故人となっており、すでに両氏が調査を行った正確な場所もわからなくなっていたため、改めて試掘調査を実施して遺跡の状況を確認するところから調査は始まりました。その結果、遺跡が残っていることが確認されたため、本格的な発掘調査が行われることとなったのです。

調査の結果、40年前の調査で見つかった井戸を再び発見することができました。

見つかった井戸は、1960年の調査で最初に発見され、3号井戸と名付けられた井戸でした(写真-14奥、新規1号井戸)。埋め戻されてからの状態が悪かったため、遺構は大きく痛んでいましたが、正確な位置がわからなくなっていた井戸を確認することができたのは大きな成果となりました。また、より詳細な調査が実施できたことから、井戸の構造が井戸枠の外側を1辺2mの木枠で囲み、その外側をさらに4m四方の木枠で囲うという三重構造になっていることがわかりました。井戸の深さは40cm程度ながらも^{されき}搦鉢状を呈し、底には砂礫を充填して浄水作用を計っていたことなど、井戸の用いられ方をも解明することができたのは、大きな成果であったと言えます。

さらに、40年前には見つかっていなかった井戸も1基確認されるという成果がありました(新規2号井戸)。この井戸は先の1号井戸よりも古い井戸で、平面が90cm四方の板材により井戸枠が作られていました。また、土台材の下には扁平な川原石を敷き詰めて基礎としており、やはり搦鉢状を呈して底には砂礫が充填されていました。これにより、この辺りには合計4基もの井戸が存在することとなりました。



写真-14 発見された井戸(1・2号井戸)

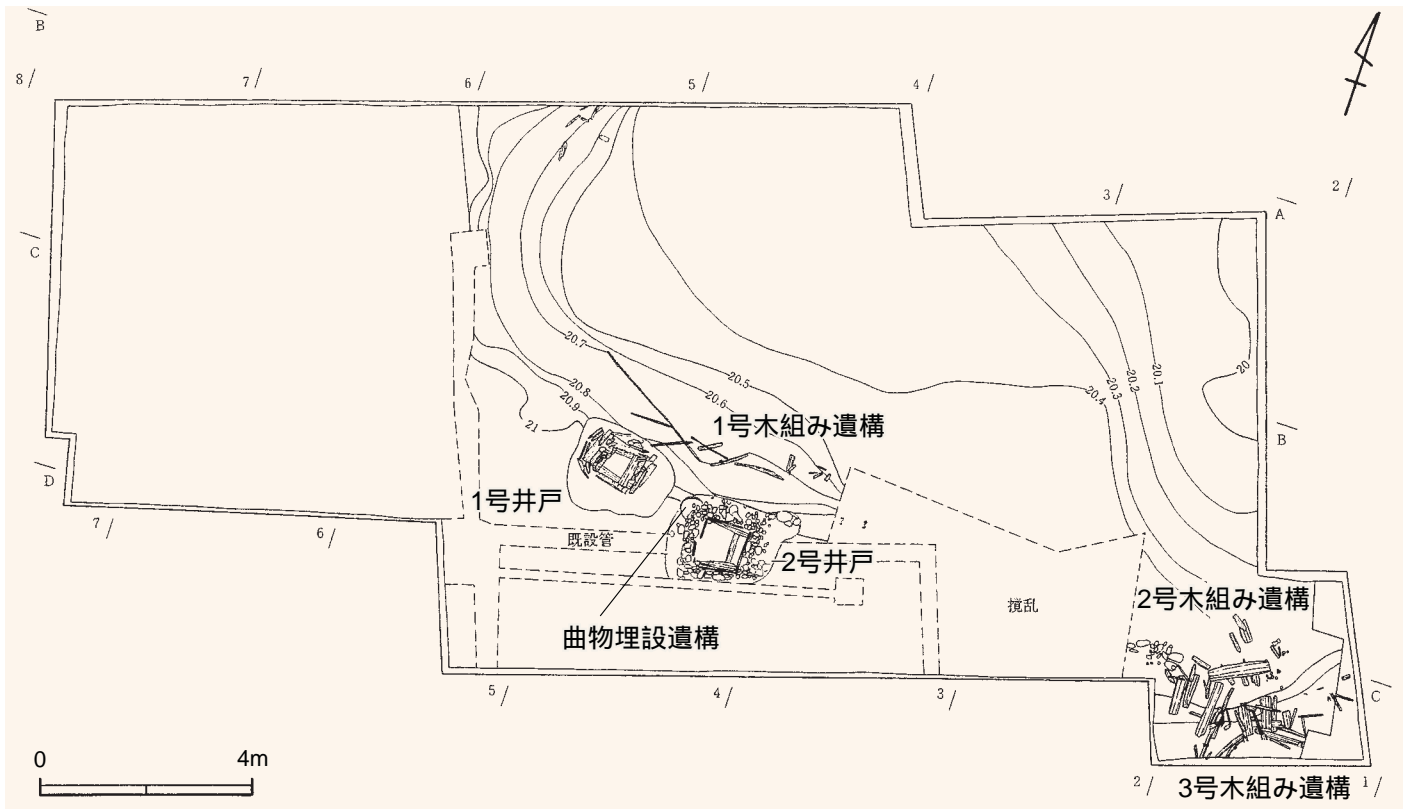


図-11 下曾我遺跡の奈良・平安時代の様子 (1/200)

そのほか、2号井戸の掘り方西端で推定直径42cmの曲物を設置した曲物埋設遺構や木組み遺構が3基検出されました。曲物埋設遺構の性格は定かではありませんが、1号井戸と関連した水場遺構ではないかと考えられます。また、木組み遺構は、横板を木杭で固定した状態のもので、土留め護岸施設と考えられます。中でも3号木組み遺構は、樋口清之氏の調査で確認されていた「護岸施設」に連続する遺構であろうと考えられるものであり、40年前の調査と合わせて、下曾我遺跡の調査成果を考えることができました。



写真-15 2号木組み遺構



写真-16 3号木組み遺構

3 文字の記された土器

下曾我遺跡では、これまでの調査で文字が記された土師器や須恵器、灰釉陶器が39点出土しています。また、隣接する永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点からも7点出土しています。文字が記されていた土器は、全て食膳具として使われる坏や椀で、底部の外側、側面の外側、内側の底面に墨で書かれています。文字は文章をなさず、一文字または二文字のものが普通です。このような文字を記した土器のことを「墨書土器」と呼んでいます。

墨書土器は、8世紀前半の奈良時代頃から日本各地で見られるようになり、平安時代に入ってしばらく経った9世紀後半から10世紀前半にかけて最も多く出土するようになります。墨書土器の出土にみられる文字の普及は、律令国家の地方支配と無関係ではありません。

都から地方に命令が伝えられた時に、地元の下級役人は文書が読めなければなりませんし、僧侶も経典を唱える必要があります。これらの地元に暮らす下級役人や僧侶を通じて、村々にも少しずつ文字が広まっていったのでしょう。

文字が記された土器の年代から、下曾我遺跡で墨書土器が出土している状況も全国的な傾向に沿っていることがわかります。具体的に、永塚遺跡群や下曾我遺跡から出土した墨書土器の代表的なものを紹介すると、写真-17で紹介した「千字文」は習字の教科書として使われていた文書の題名です。「上主振」の主振は、郡司（郡の長官）の役職名である主帳と同じ意味を表します。「上」は「奉る」の意味でしょうか。



写真-17 墨書土器（左：千字文・文、右：上主振）

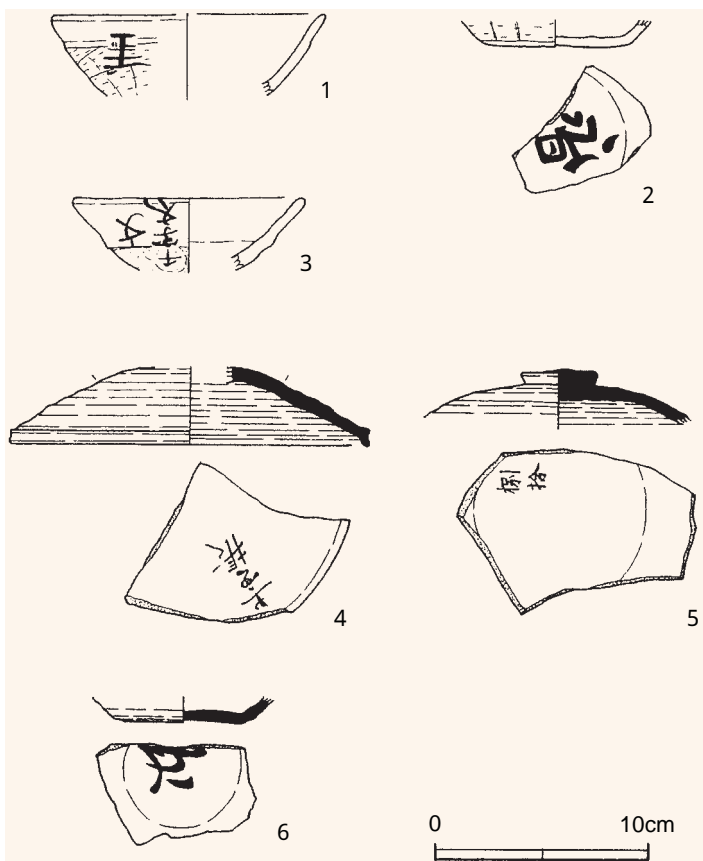


図-12 下曾我遺跡出土の墨書土器（1/5）

他にも表2のような墨書土器が出土しています。図-12にも示した「厶」という字は、「人」を表す則天文字で「(人の) 一生」から来ています。先の「振」も則天文字ですが、則天文字とは中国唐代に武照（則天武后）によって制定され、周の時代まで用いられた独特の文字です。「墨書土器」には則天文字が使われている例が見られます。

また、「家」「大家」は「ヤケ」と読み、「門」と同じように郡家のような公共施設を表しています。「永日」などは僧侶の名前かもしれません。「捌拾」は「八十」の大字です。この時代の数字は、小字（一・二・三…）ではなく大字（壹・貳・参…）が使われていました。このように、下曾我遺跡出土の墨書土器は、一般的な集落遺跡で出土する墨書とは異なり、官衙に関連するような文字が記されているということが特徴的です。一緒に出土した隆平永寶や帯金具、木簡などとともに下曾我遺跡が足下郡家に関連付けて考えられてきた理由の一つです。

下曾我遺跡出土墨書土器

	釈文	器種	時期		釈文	器種	時期
1	□	土師器・坏	8 C後半	20	東	土師器・坏	
2	厶	土師器・坏	10 C前後	21	木	土師器・坏	
3	千字文 文	土師器・坏	10 C第3 四半期	22	堂？	土師器・坏	
				23	謂？	須恵器・高台坏	
4	永日	土師器・坏	8 C中葉～10 C前半	24	永東	土師器・坏	
5	□	土師器・坏	8 C中葉～後半	25	永毛？	須恵器・坏	
6	家？	須恵器・坏	9 C後半～10 C前半	26	田	須恵器・坏	
7	上主振	須恵器・蓋	8 C中葉～後半	27	東	土師器・坏	
8	□	須恵器・蓋	8 C中葉～後半	28	□	土師器・坏	
9	□	須恵器・蓋	8 C中葉～後半	29	厶	灰釉陶器・碗	
10	井	土師器・坏	8 C中葉	30	□	須恵器・坏	
11	□	土師器・坏	8 C中葉	31	毛	土師器・坏	
12	盈？	須恵器・坏	9 C中葉	32	毛	土師器・坏	
13	捌拾	須恵器・蓋	8 C中葉～後半	33	□	須恵器・高台坏	
14	□	須恵器・高台坏	8 C初頭	34	○	土師器・坏	
15	門	灰釉陶器・碗		35	永東	土師器・坏	
16	厶	須恵器・高台坏		36	生山	須恵器・坏	
17	永東 寺	土師器・坏		37	廿万	須恵器・高台坏	
					南		
18	大家	土師器・坏		38	叶力	須恵器・坏	
19	子	土師器・坏		39	毛	土師器・坏	

永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点出土墨書土器

永塚下り畑遺跡第Ⅰ地点出土墨書土器

	釈文	器種	時期		釈文	器種	時期
1	南	土師器・皿	9 C末～10 C初頭	1	永	須恵器・高台坏	
2	南	土師器・坏	9 C末～10 C初頭	永塚下り畑遺跡第Ⅵ地点出土墨書土器			
3	□	土師器・坏	9 C以降		釈文	器種	時期
	□			1	瓜	土師器・坏	
4	□	須恵器・瓶	9 C後半以降	※ □は判読不能の文字			
5	□	須恵器・坏	10 C代				

表-2 永塚遺跡群・下曾我遺跡出土の墨書土器一覧表

V 永塚・下曾我遺跡と千代の寺院跡

1 足下郡家と千代廃寺

永塚遺跡が足下郡家あししもぐうけの所在地である可能性を先に示しましたが、下曾我遺跡を含む周辺遺跡の様相を概観しながら、再度このことについて考えてみましょう。

永塚・下曾我遺跡に隣接する千代台地には、本書シリーズNo.3でも紹介した千代廃寺ちよはい（千代寺院）が建設されていました。千代廃寺は研究史の上では、初期国分寺こくぶんじに比定されたこともありました。これは「府中ふなか」や「国府津こくふづ」という地名、そして千代廃寺の伽藍配置が東大寺式であるとされたことによります。

そのため、千代廃寺に近接した永塚台地に初期相模国府さがみこくふがあったとする説も、木下良氏きのしたりょうによって唱えられました。現在では初期相模国府説は否定されていますが、この考え方は、そっくり初期寺院と郡家の関係に置きかえることができます。というのも、郡家の近隣で初期の古代寺院の跡が発見されることが多いからです。こうした寺

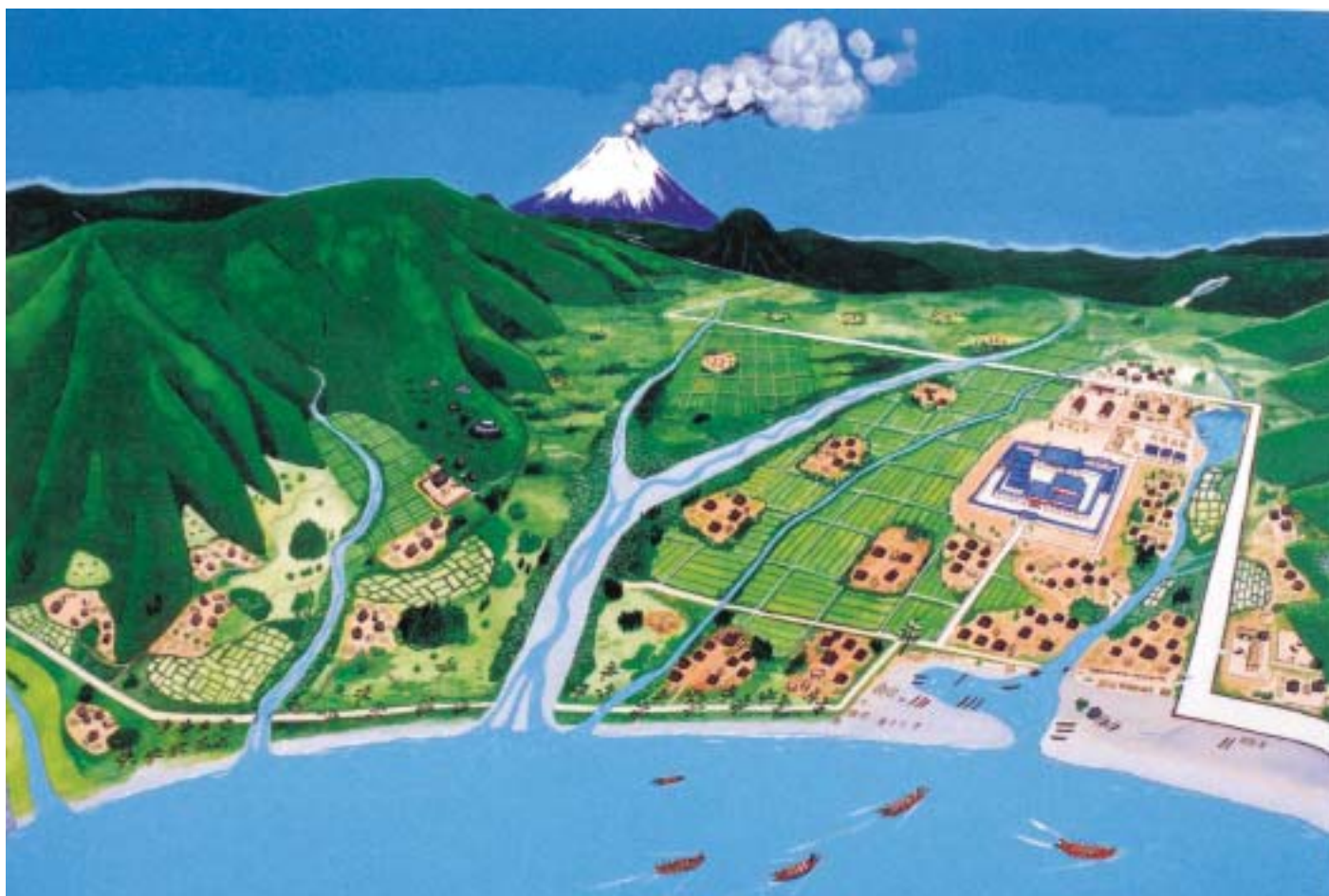


図-13 古代の足柄平野復原想像図（さかいひろこ画）

院は、郡寺・郡家付属寺院・郡家周辺寺院などと呼ばれています。国府津も、国府の津（湊）を語源とするのではなく、「郡津」が転訛したのではないかと考えられています。

では、永塚に足下郡家があったとすると、その中心はどこだったのでしょうか。ここで、先に示した集落遺跡の空白地、永塚観音堂周辺に広がる永塚長森遺跡が候補地としてクローズアップされてきます。

そして、郡家の存在と深く関わる古代の東海道は、足下郡と足上郡の郡境を東西に走り、大磯丘陵の手前で南に方向を変えて国府津付近に比定されている小総駅家へと続くものと思われる。

一方で、足下郡家に深く関係すると考えられてきた下曾我遺跡は、どのような性格の遺跡でしょうか。下曾我遺跡の立地は、台地から下った低地部にあたります。この一帯は、永塚小海端、曾我岸、曾我光湖、曾我耕海、千代光海などの字名に残るように、森戸川の氾濫による低湿地がひろがっていました。低湿地が埋め立てられて今の姿になったのは、天保8年（1837）以降であること



写真-18 小海開発記念碑

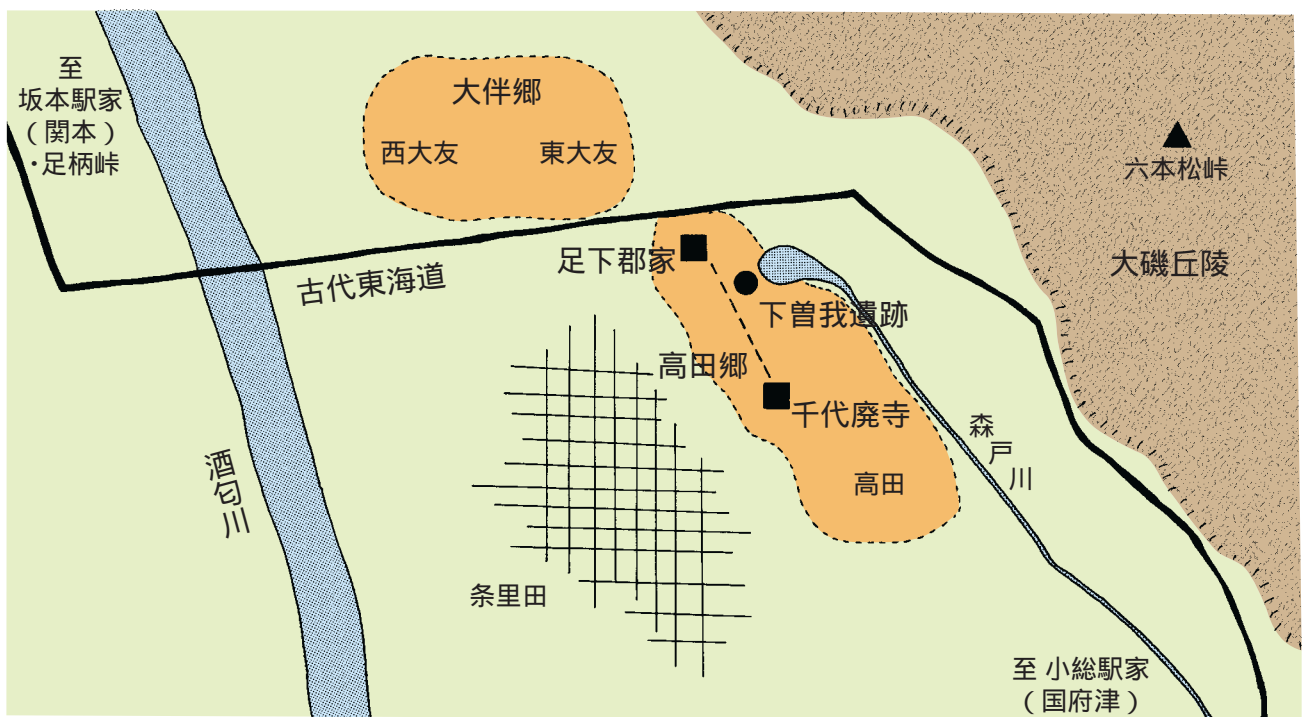


図-14 想定古代東海道と足柄平野の景観

が、千代三島神社の開拓記念碑からわかります。おそらく、古代には小舟を使って下曾我遺跡の辺りまでは、森戸川をさかのぼることができたのでしょうか。そのように考えると、下曾我遺跡は郡家に付属する津の機能を持っていたと考えることができます。

隣接する永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点で見つかった舗装道路跡も、郡家と津、さらには千代廃寺を結ぶ地域の主要道路だったのではないのでしょうか。

2 永塚遺跡周辺の古代氏族

永塚遺跡の北西に位置し、最近にわかに脚光を浴びてきた遺跡ににしおども西大友遺跡群があります。それは、以前に千代廃寺で採集された軒丸瓦におおともごじゅっこ(さと)「大伴五十戸」という文字が記されていることが発見されたことによります。現存する西大友や東大友の地名は、古代のおおともごう「大伴郷」の遺名です。また、「郷」は奈良時代以前はさと「五十戸」やさと「里」と呼ばれていました。したがって大伴五十戸は大伴郷の前身で、その名称から中央のかわでし膳氏を伴造とするとものみやつこ大伴部の集団が暮らしていた場所である可能性があります。

大伴部は、主に海産物を納める部民の集団であったとされています。大伴郷の範囲にあたる西大友遺跡群では、これまでに2地点の調査しか行われていませんが、古代の集落遺跡があることがわかっています。この集落は、7世紀末頃から8世紀初頭頃の奈良時代にいと意図的に設置された村であろうと考えています。

大伴郷は足上郡に属しますので、千代廃寺や永塚の郡家が南に遺名が残る足下郡たか高田郷に属するのであれば、大伴郷と高田郷の間には郡境があることになり、その境として古代の東海道が利用されていた可能性は高いと思われます。千代廃寺が創建されたのは7世紀末から8世紀初頭のことでしょうから、大伴五十戸の集団が千代廃寺に瓦を納めたということは郡を越えたこうのう貢納ということになります。



写真-19 軒丸に記された「大伴五十戸」線刻



写真-20 西大友北畑遺跡出土の土器

また、この地域には大伴部の他にも、複数の氏族が分布していました。特にはせつかべのみやつこ丈部造氏は、しながこくぞうけ師長国造家に比定される足柄平野でも最有力の氏族です。はせつかべし丈部氏の本拠地は6世紀から7世紀の古墳分布から、小田原市域北西部の久野丘陵から南足柄市にかけての地域と考えられています。



しかし、国府津三ツ俣遺跡F地区でも、「丈」と刻書された平安時代の灰釉陶器碗 **写真-21** 国府津三ツ俣遺跡出土の「丈」線刻の灰釉陶器が出土しています。この遺跡では、一般的な集落にはみられない古墳時代後期の大型井戸も発見されています。このことから、国府津にも古墳時代後期から平安時代まで、連綿と丈部氏に連なる有力首長が拠点を構えていた可能性があります。

さらに、そが曾我兄弟の仇討ちでも有名な「曾我」という地名は、中央の有力豪族であるそが蘇我氏が、東国進出の際に設置したべみん部民集団がいた名残であることも指摘されています。

このように、永塚周辺には複数の氏族や部民集団が分布していたのです。

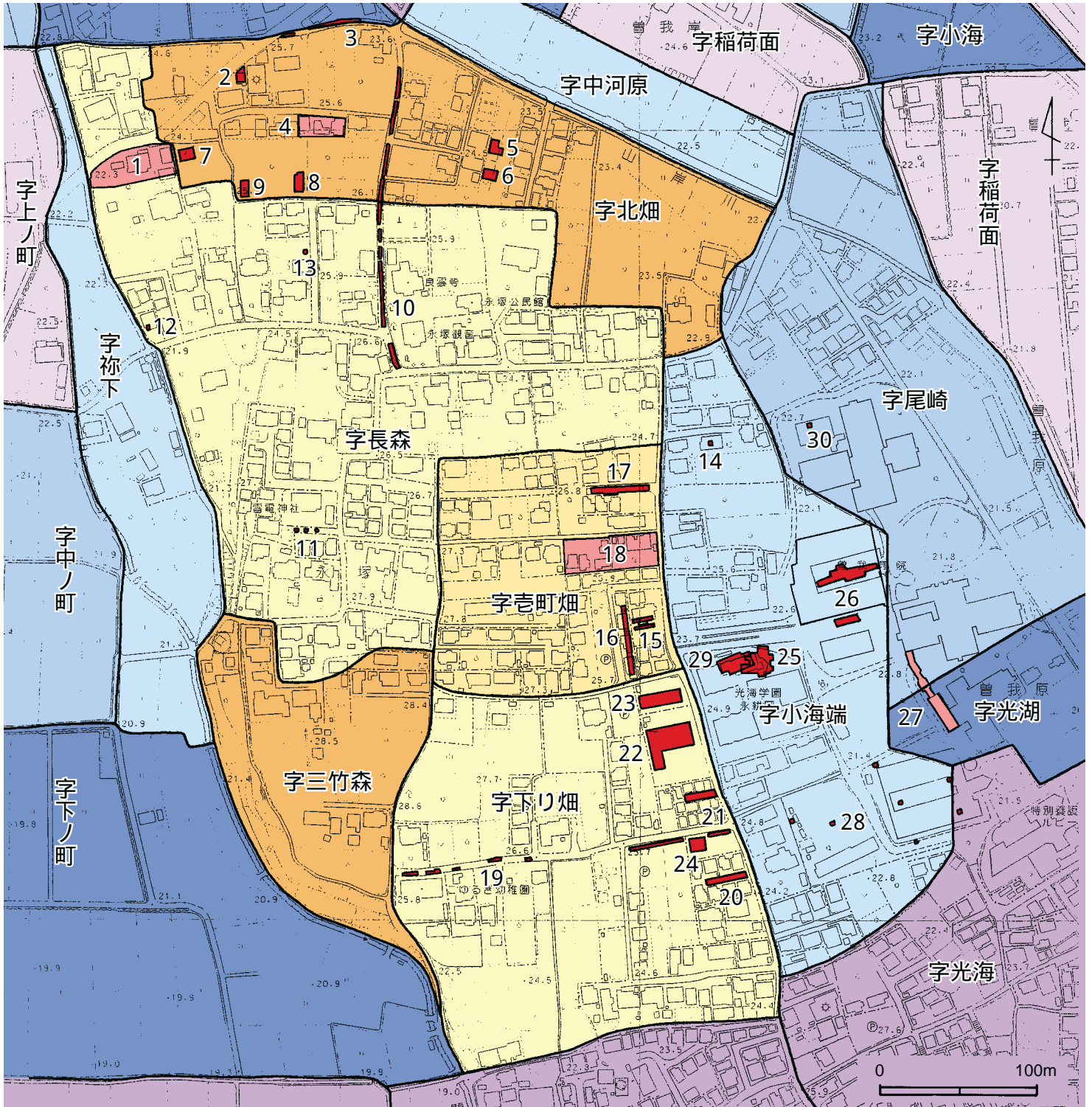
3 足柄平野の地域拠点

近年の研究では、国府や郡家などの官衙遺跡が、陸上交通と水上交通のけっせつてん結節点、すなわち交通のようしゅう要衝に建設されているということがわかってきています。郡家比定地としての永塚遺跡群も、陸路では東海道が付近を通り、かわみなと下曾我遺跡を川湊として森戸川を通じて相模湾へと出るという、水陸交通の結節点に建設されたと考えられます。

また、国府津は郡家のそとみなと外湊として、千代・永塚台地の地域拠点と有機的な関係にあったことが様々なはんにゅうどき搬入土器、がとう瓦塔、じゅうそくつきぞうこつ獣足付蔵骨器、せきたい石帯などの遺物から推測されます。

一方、足柄平野に分布する豪族が複数の氏族で構成される実態は、郡の支配者である郡司層が、異なる氏族で成り立っていたことを物語ります。これらの在地首長たちが共同して郡家を運営し、力を合わせて寺院を建立して仏教を信仰していたと想定されます。特に寺院の建立と仏教の信仰は、在地首長が地域社会に対して自らの権威を示すのと同時に、中央政権へ結束をアピールする上では欠かせないものと言えます。

まさに、本書で取り上げた永塚や千代一帯は、古代の足柄平野における政治的、宗教的、文化的中心地だったのです。



No	遺跡名	弥生後～古墳前		古代	No	遺跡名	弥生後～古墳前		古代	No	遺跡名	弥生後～古墳前		古代
		周溝墓	住居跡				周溝墓	住居跡				周溝墓	住居跡	
1	永塚北畑遺跡				11	永塚長森遺跡 (範囲確認)				21	永塚下り畑遺跡第Ⅲ地点			
2	永塚北畑遺跡第Ⅰ地点	2		4	12	永塚長森遺跡 (試掘)				22	永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点		10	24
3	永塚北畑遺跡第Ⅱ地点		1	3	13	永塚長森遺跡第Ⅱ地点				23	永塚下り畑遺跡第Ⅴ地点		4	
4	永塚北畑遺跡第Ⅲ地点				14	永塚小海端遺跡 (試掘)				24	永塚下り畑遺跡第Ⅵ地点	1	2	3
5	永塚北畑遺跡第Ⅳ地点			2	15	永塚一町畑遺跡第Ⅰ地点			5	25	下曾我遺跡 (第1～3次調査)			
6	永塚北畑遺跡第Ⅴ地点			12	16	永塚一町畑遺跡第Ⅱ地点			2	26	下曾我遺跡 (第4・5次調査)			
7	永塚北畑遺跡第Ⅵ地点	1		18	17	永塚一町畑遺跡第Ⅲ地点				27	下曾我遺跡 (第5次追加調査)			遺構なし
8	永塚北畑遺跡第Ⅶ地点			2	18	永塚一町畑遺跡第Ⅳ地点			4	28	下曾我遺跡 (第6次調査)			遺構・遺物なし
9	永塚北畑遺跡第Ⅷ地点			2	19	永塚下り畑遺跡第Ⅰ地点		5	2	29	下曾我遺跡 (2000年度調査)			
10	永塚長森遺跡第Ⅰ地点	1	2		20	永塚下り畑遺跡第Ⅱ地点			12	30	下曾我遺跡 (試掘調査)			遺構・遺物なし

図-15 永塚遺跡群・下曾我遺跡周辺の調査地点位置図 (1/5,000)

引用・参考文献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした文献を掲載しました。永塚遺跡群並びに下曾我遺跡についてさらに詳しく知りたい方は、以下の書籍を参考にしてください。

- 小田原市 1998『小田原市史』通史編 原始古代中世、小田原市
小田原市教育委員会 2009『千代寺院跡の実像を探る』記録集、小田原市教育委員会
赤星直忠ほか 1979『神奈川県史』資料編20、神奈川県
大島慎一 1986 a 「永塚北畑遺跡の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第21集、小田原市教育委員会
大島慎一 1986 b 「下曾我遺跡の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第21集、小田原市教育委員会
大島慎一ほか 2005『永塚下り畑遺跡第Ⅵ地点』小田原市文化財調査報告書第134集、小田原市教育委員会
香川達郎 2002 『永塚北畑遺跡第Ⅱ地点・永塚長森遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第104集、小田原市教育委員会
齋木秀雄ほか 2002『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』鎌倉遺跡調査会・下曾我遺跡発掘調査団
佐々木健策 2000 a 「永塚字小海端148外における遺跡範囲確認調査」小田原市文化財調査報告書第81集、小田原市教育委員会
佐々木健策 2000 b 「永塚字長森229-2号における遺跡範囲確認調査」小田原市文化財調査報告書第81集、小田原市教育委員会
佐々木健策 2002 「永塚字小海端311-1・6における試掘調査」小田原市文化財調査報告書第90集、小田原市教育委員会
佐々木健策 2003 a 「永塚字下り畑408外・永塚字小海端333外における試掘調査」小田原市文化財調査報告書第107集、小田原市教育委員会
佐々木健策 2003 b 「曾我岸字尾崎148における試掘調査」小田原市文化財調査報告書第107集、小田原市教育委員会
佐々木健策 2003 c 「永塚字小海端333外における試掘調査」小田原市文化財調査報告書第107集、小田原市教育委員会
杉山幾一 1994 「No133永塚遺跡 (No33)」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査概要』36、神奈川県教育委員会
杉山博久ほか 1971『小田原市文化財調査報告書』第4集、小田原市教育委員会
杉山博久ほか 1986「永塚下り畑遺跡」『西相模における考古学的調査の記録(1)』、小田原考古学研究会
杉山博久 1989『永塚下り畑遺跡第Ⅱ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第26集、小田原市教育委員会
杉山博久 1995「No118永塚一町畑遺跡第Ⅲ地点 (No33)」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査概要』37、神奈川県教育委員会
塚田順正 1986「永塚一町畑遺跡の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第21集、小田原市教育委員会
南館則夫 1989 a 「No160小田原市No33遺跡」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査概要』36、神奈川県教育委員会
南館則夫 1989 b 「No155小田原市No33遺跡」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査概要』36、神奈川県教育委員会
山口剛志 2004「永塚字長森265-4における試掘調査」小田原市文化財調査報告書第117集、小田原市教育委員会
矢納健志ほか 1983「小田原市下曾我遺跡発掘調査報告書」『小田原考古学研究会会報』11、小田原考古学研究会
渡邊千尋 2007「永塚北畑遺跡第Ⅳ・Ⅴ地点」『平成19年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』小田原市教育委員会

小田原の遺跡探訪シリーズ 4

永塚遺跡群と下曾我遺跡

—川辺に営まれた地域拠点—

平成21年2月27日 印刷

平成21年3月27日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 株式会社アルファ

